



2014.7.7 (月)

誤診されやすい「甲状腺の病気」

甲状腺の病気は、自分ではなかなか気づきにくく、ほかの病気と間違われやすいといわれている。なぜなら、甲状腺ホルモンの働きが体の各組織に及んでいるため、甲状腺機能の亢進や低下によって実にさまざまな症状が全身のあらゆる部位はもちろんのこと、精神面にも現れるからだ。

甲状腺に何らかの異常がある場合、よく見られるのは「首の腫れ」だ。そのほかにも、「動悸」「のどが渇く」「食欲不振」「憂うつ」などの症状があるが、ほかの病気の症状とも似ていることから「糖尿病」「高血圧」「更年期障害」「うつ病」などと誤診され、不快な症状の原因が甲状腺にあることに長い間気づかないまま、誤った治療を続けてしまう場合がある。

また、年齢や性別、体質によっても甲状腺の病気の症状の現れ方が異なるため、甲状腺の異常は気づかれにくい。こうした事態を避けるためにも、気になる不快な症状があってもはっきりしない場合は、甲状腺の病気を疑い、甲状腺の専門医を受診することが大切。

-甲状腺の症状（首の腫れ）の見分け方-



- 甲状腺はのどぼとけの下辺りの前面にあるので鎖骨の上側を指先で触る
  - 甲状腺が病気になると、甲状腺の部位が腫れたり、腫れた部分が硬くなったりする
  - ある程度腫れが大きくなると、目で見ても分かるようになる
- ★「腫れ」や「しこり」があるか、鏡で見て、触って確認してみよう！

## ◎甲状腺ホルモンが過剰になる「バセドウ病」◎

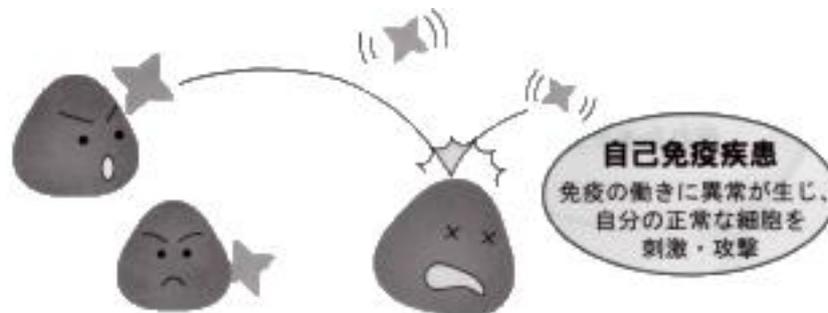
### 〈バセドウ病の特徴・原因〉

甲状腺の病気は、甲状腺から甲状腺ホルモンが過剰に分泌されることによって、さまざまな症状が現れる病気であり、免疫の働きに異常が生じて起こると考えられている。原因はまだ分かってはいないが、男性よりも女性がかかりやすいという特徴があり、男女比は男性 1 人に対して女性 9 人だ。しかし、バセドウ病の場合は患者の男女比は男性 1 人に対して女性 4 人となり、男性も少なくない。また、バセドウ病の発症年齢は 20～30 歳代に多くなる。

免疫の働きには多くの細胞がかかわっており、ウイルスや細菌などの異物が侵入したときには即座に駆けつけ、攻撃する。ウイルスや細菌などの外敵を「抗原」、これに対抗して攻撃・排除する物質は「抗体」といい、免疫にかかわる細胞は、お互いに密接に連携を取りながらそれぞれの細胞が正しく働くことによって体を守っている。しかし、何らかの原因で免疫の働きに異常が生じると、自分自身の組織を異物と認識してしまう。

そして、「自己抗体（自分の細胞や成分を異物と間違えて刺激・攻撃する抗体）」という異常な抗体や免疫細胞をつくり、自分の正常な細胞を刺激・攻撃する。このような自己抗体によって組織の炎症や損傷が起きる病気を「自己免疫疾患」と呼ぶ。

バセドウ病の場合、自分の甲状腺に作用する甲状腺刺激ホルモン（TSH）とよく似た働きをした自己抗体が体内にでき、甲状腺刺激ホルモン（TSH）が増えたときと同じように甲状腺を刺激（攻撃）し続ける。この自己抗体が体から消えない限り、甲状腺ホルモンはつくり続けられるため、分泌が過剰になってしまう。



## 〈バセドウ病の症状〉

甲状腺の機能が亢進して甲状腺ホルモンの分泌が過剰になると、全身の新陳代謝が必要以上に高まり、その影響でさまざまな症状（体温上昇、多量の汗、手の震え、体重減少、下痢、イライラして落ち着かないなど）が現れる。

また、バセドウ病という名前は、1840年に病気の論文を発表したドイツの医師であるカール・フォン・バセドウの名前に由来しており、バセドウ医師はバセドウ病の特有の症状として「首の腫れ（甲状腺腫）」「頻脈（早い脈）」「眼球突出」の3つの症状を挙げ、「メルセブルグの3徴」と呼んだ。メルセブルグとは、バセドウ医師の診療所の地名だ。

症状の現れ方には個人差があるが、バセドウ病では、主に次のような症状が現れる。

### ●新陳代謝が過度に高まる（体温上昇、多量の汗、手の震え、体重減少など）

新陳代謝が過度に高まることによって「体温が上昇して多量の汗をかく」「手が震える」「下痢になりやすい」「食欲が増しても体重が減少する」などの体の症状以外に、「神経が高ぶってイライラして落ち着かない」などの精神面での症状もある。

女性の場合、更年期障害の症状として間違われやすいので注意が必要。

### ●首の腫れ（甲状腺腫）

バセドウ病の原因となる自己抗体が甲状腺を刺激し続け、その影響で甲状腺細胞が増えることから、蝶が羽を広げたような形のまま甲状腺全体が腫れて首全体がふっくらと太くなったように見える。ただし、腫れている部分に痛みを感じたり、食事に差し支えたりということはない。

### ●動機や息切れ、頻脈

心臓の働きが過剰になるため、動悸や息切れ、頻脈などが現れる。常に激しい運動をしているのと同じ状態になるので、疲れやすくなる。

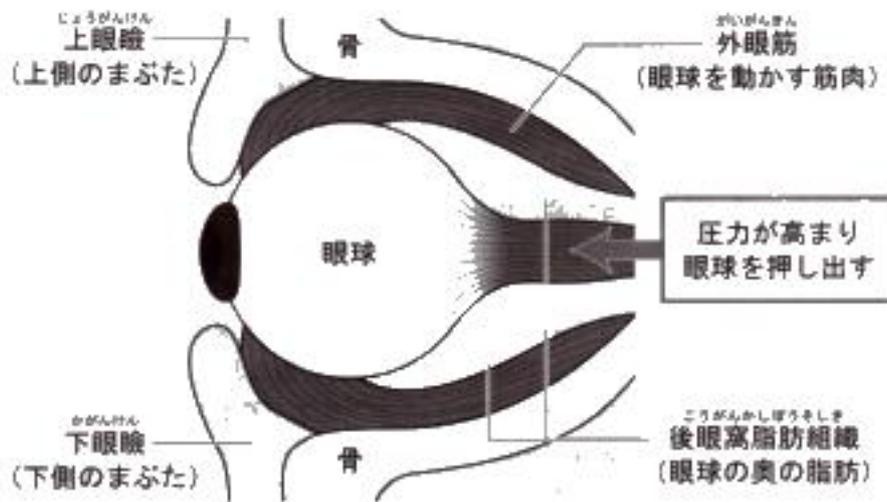
正常の心拍数は、1分間に60～80回程度だが、バセドウ病では100回以上になることも珍しくない。

## ●眼球突出

眼球突出はバセドウ病特有の症状だが、日本人は欧米人と比較すると眼球突出の症状が軽く、10人に2～3人に見られる程度。

外眼筋（がいがんきん）と後眼窩脂肪組織（こうがんかしぼうそしき）の体積が増加し、眼球の後ろ側の圧力が高まり、眼球が押し出される。

-バセドウ病の眼球突出-



〈バセドウ病の検査〉

バセドウ病の検査は、血液検査が中心となる。採血によって血液中の甲状腺ホルモンの量を測定し、過剰かどうかを調べる。

また、血液中の甲状腺に特異的な抗体を調べて診断する。

## ●TSH 受容体抗体検査 (TRAb)

脳の下垂体から分泌される甲状腺刺激ホルモン (TSH) の受容体の抗体を調べる。間違ってつくられた TSH 受容体抗体が、甲状腺刺激ホルモン (TSH) と似たような働きをすることで、甲状腺刺激ホルモン (TSH) 受容体を刺激 (攻撃) して、甲状腺ホルモンの分泌を促し、バセドウ病となる。

よって、血液検査で TSH 受容体抗体 (TRAb) が陽性の場合はバセドウ病と診断される。

## 〈バセドウ病の治療〉

バセドウ病の治療には、「薬物療法」「アイソトープ（放射性ヨウ素）治療」「手術」の3つの治療法があるが、日本では薬物療法が中心。

### ●薬物療法

抗甲状腺薬を服用する。抗甲状腺薬は、甲状腺ホルモンがつけられるのを抑える働きがある。外来通院で治療できるため、誰でも受けられる治療だが、「かゆみ・発疹」「肝機能障害」「関節痛」「発熱」などの副作用が服用後3ヶ月以内に出ることがあるので注意が必要。副作用が現れた場合は、すぐに主治医に相談して診察を受けるようにする。

また、薬の服用期間が長くなる場合が多く、症状が軽くなったからといって自己診断で薬の服用を勝手に中止すると症状が再発することが多く見られる。必ず医師と相談しながら治療を進めていくことが大切。

### ●アイソトープ（放射性ヨウ素）治療

アイソトープ治療は、放射性ヨウ素のカプセルを1回服用。体内に取り込まれると甲状腺に集まるヨウ素の特徴を利用し、放射線によって増えすぎた甲状腺細胞を攻撃して数を減らす。亢進した甲状腺機能を改善しようとする治療だが、効きすぎると甲状腺機能が低下することがある。

薬物の副作用が強く、薬物療法で治りにくい方は、アイソトープ治療が行われる。また、体には害がない程度の放射線の使用だが、原則として、近く妊娠を希望している方、妊婦・授乳婦、18歳未満にはアイソトープ治療は行えない。

### ●手術

バセドウ病の手術は、甲状腺の大部分を切除する治療が行われる。甲状腺を切除する治療が行われる。甲状腺を切除することから再発が少なく、甲状腺ホルモンの分泌を減らすことができる。ただし、甲状腺は、全身の機能にかかわる大切な臓器であるため、手術ではどの程度切除するか、どの部位を残すかが重要となり、手術における危険性や合併症もあり得る。